

令和元年6月27日現在

機関番号：33939

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11799

研究課題名(和文) 精神障害当事者のためのソーシャルサポート質問紙の段階的開発

研究課題名(英文) Development of Social-support Questionnaire for Family with Psychosis clients

研究代表者

岩瀬 信夫 (Iwase, Shinobu)

名古屋学芸大学・看護学部・教授

研究者番号：40232673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：属性に関する質問、ソーシャルサポートの範囲と頻度、ソーシャルサポートの程度に関する質問、満足に関する主観的感情の5段階の質問24項目から構成された精神障害者の家族用質問紙を開発し調査した。調査結果は、任意抽出法にて300部を配布し、郵送法にて131部を回収した。回答者の平均年齢は70.9歳であった。診断は統合失調症96名であった。障害が明らかになってからの期間は19.4年、病気のことを相談できる身内は2人、友人の数は2.8人であった。ソーシャルサポートの程度と満足に関して「わりに満足」しており、家族や友人に子供の世話を「あまり頼まず」、特別な援助は「あまり必要としない」特徴があった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神障害者を抱える家族のソーシャルサポートに関する研究は極めて少なく、今回は自助グループを通して調査を行った。高年齢で、病気の診断がついてから20年近く経過しているが、多くは活動的であるにも関わらず、病気のこととなると、相談できる身内よりも、友人の方が多く特徴を持っている。その中でも、医療関係者以外の相談相手は圧倒的に自助グループの関係者を友人としており、病気のことを相談するという行為が極めて限定された範囲に限られていることが示唆された。精神障害の啓もう、社会的支援という点からの自助グループの果たす役割の大きさが示唆されるとともに、そこに繋がらない家族への支援の仕組みを構築する必要がある。

研究成果の概要(英文)：The questionnaire for the family with a psychosis' client was developed from four parts, contained demographic questions, size and frequency of social support, and the satisfaction from the social support. The Last part of the questionnaire was used same part of the Duke Social Support Inventory Japanese version(DSSI-J).The questionnaire were hand outed by a local family peer group, and 131 questionnaire were posted. The participants' average age was 70.9 years old. Ninety six were schizophrenia. They spent over 19 years when they knew the patients' diagnoses. They have 2 relatives and 2.8 friends whom they ask advice about their psychotic family member. They feel quite a few satisfaction from social support. They were not very reliable to ask their child care. Also, they did not need much help.

研究分野：精神看護学

キーワード：ソーシャルサポート 質問紙 精神障害者 家族

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

Lazarus らのストレス学説を背景に, Caplan(1976)をはじめ, Cobb(1979)、Kahn(1979)、Weiss(1974)、House(1983)らのソーシャルサポートのストレス緩衝仮説の流れに沿った研究が数多くなされてきている。

看護領域や精神医療領域では Norbeck のソーシャルサポート質問紙である Norbeck Social Support Questionnaire (NSSQ) が南ら (1990) により日本語版が開発され、最近の調査でも使用されているが、簡便さに欠け、岩瀬ら (1997) により精神疾患患者への使用にあたっては負担が大きいという指摘もされている。そこで、より簡便な測定具を開発し、一般人はもとより将来的に精神疾患患者にも使用可能な測定具として Landerman と George ら(1989)により開発された Duke Social Support Index (以下 DSSI) 11 項目版に注目した。この測定具の日本語版の開発は波多江・岩瀬ら(2002)によって行われている。DSSI - 11 は高齢者のストレス反応に対してソーシャルサポートの緩衝作用をみるために開発されたものであるが因子構造の証明には至っていない。

岩瀬ら (2009) は 35 項目 Duke Social Support Index 日本語版を都市部の 950 件に簡易標本抽出法にて配布し郵送法で回収した 699 件のうち 412 件のソーシャルサポート項目 25 項目への完全回答を基に、信頼性と妥当性の検証を行った。探索的因子分析はバリマックス回転を伴う最尤法を用い 22 項目 3 因子が抽出された。次に信頼性の検証を行いくロソバックの係数は DSSI-J (  $\alpha$ :.909 ) 第 1 因子 ( 情緒的支援;  $\alpha$ :.868 ) 第 2 因子 ( 手段的支援;  $\alpha$ :.861 ) 第 3 因子 ( 認識評価的支援;  $\alpha$ :.838 ) という結果を得た。更に構成概念妥当性を検証し、「ソーシャルサポート」は「情緒的支援」、「手段的支援」、「認識評価的支援」からなる 15 項目の 2 次因子モデルとして GFI:0.916, AGFI:0.892, CFI:.925, RMSEA: 0.068 で適合性が支持された。この研究の対象は男性 145 名, 平均年齢 39.5 歳, 女性 267 名, 平均年齢 38.6 歳であり。職業は会社員 262 名, パート 48 名, 主婦 37 名, 学生 21 名, 自営業 18 名その他と続き, 有職者が 80.8% を占め、ほぼ、社会人対象のソーシャルサポート測定具といえる。

ところで、精神看護の最近の傾向の中で、認知行動療法的介入の研究が増え増加傾向にあるが、このような看護の研究動向からアウトカムを検討したり、ストレス研究、ソーシャルサポート研究を行っていく上で、ストレスフルな看護学生や看護職、さらに精神障害者にも共用できる測定具の開発は急務である。

### 2. 研究の目的

当初の研究目的では今までの研究を進展させ DSSI-J をもとに、学生、看護学生、看護職などのメンタルヘルス面でのソーシャルサポート測定と精神科臨床研究における使用という観点から、学生用、看護師用、地域で暮らす精神障害者当事者用ソーシャルサポート測定具開発を行うことを研究目的としたが、倫理的手続きを含めた利用者へのアクセスを勘案し、家族構成員に精神障害者を含む、精神障害者の家族のソーシャルサポート質問紙の開発に変更した。

### 3. 研究の方法

A 項目として属性精神科の病気と相談できる人との関係についての質問 6 項目 ( 自由記載を含む ) に関する質問、B 項目としてソーシャルサポートの範囲と頻度に関する質問 10 項目、C 項目として DSSI-J のソーシャルサポートの程度と満足に関する主観的感情の 5 段階の質問 24 項目からなる精神障害者の家族用質問紙を開発し、自助グループを通じた任意抽出法にて配布し、郵送法にて回収することとした。

( 名古屋学芸大学倫理審査承認番号 330 2019 年 4 月 8 日 )

### 4. 研究成果

調査期間：2019 年 4 月 16 日 ~ 5 月 16 日

配布件数：300 件

回収件数：131 件 ( 回収率 43.7% )

回答者の平均年齢は 70.9 歳 ( 中央値 71 歳、最頻値 71 歳 ) 標準偏差 9.6 であった。診断は統合失調症 96 名、気分障害 11 名、発達障害 2 名、未記入 14 名、分類不能 1 名、うち複合診断の者 13 名であった。障害が明らかになってからの期間は 19.4 年 ( 中央値 19.8、最頻値 20、最大値 60.5、最小値 0.3 ) 標準偏差 10.6 であった。病気のことを相談できる身内は 2 人、友人の数は 2.8 人であった。

1 週間会話の回数は平均値 2.0 回 ( 中央値 1.0、最頻値 0.0 SD = 2.90 )、携帯を含む電話の回数も平均値 1.76 回 ( 中央値 1.0、最頻値 0.0 SD = 2.63 ) であった。SNS によるコンタクトは平均値 0.93 回 ( 中央値 0.0、最頻値 0.0 SD = 2.29 )、仕事以外でのグループ活動への参加は平均値 1.46 回 ( 中央値 1.0、最頻値 0.0 SD = 1.47 )、個人的なつきあいの平均値は 0.76 回 ( 中央値 0.0、最頻値 0.0 SD = 1.65 ) であった。また、相談でき医療関係者以外の相談できる相手として家族会の関係者を上げていた調査協力者は 79 名いた。

平均的な研究参加者の社会的接触は週に 2 回ほど同居者以外と個人的な会話を持ち、電話は週に 1.7 回ほどかけ、週 1 回に満たない回数 SNS を使い、1.46 回会合に出かけ、個人的に人と会うことは週に 1 回に満たない 0.76 回であった。

最も頻度の高い社会的接触は、週に 1 回同居者以外と個人的な会話を持ち、電話を週に 1 回かけ、SNS は使わず、週に 1 回、何かの会合に出かけ、個人的に人と会うことは無いという行動を

行っていた。

次にソーシャルサポートに関する主観的満足度については以下の通りであった。

C-1「友人や身内と会う頻度（回数や程度）に満足していますか」という設問には5段階リッカートスケールにて5を最大として平均値3.23、最頻値4の満足を示していた。

C-2「どれほどの頻度で寂しさを感じますか」という質問については平均値2.56、最頻値2で寂しさを感じる頻度はあまり感じないという回答であった。

C-3「長く続いている親しい人がいますか」という設問では平均値3.51、最頻値4で親しい人がいることを示していた。

C-4「家族や友人に自分が役に立っていると思いますか」という設問については、平均値3.70、最頻値4でわりに役に立っていることとらえていることが示された。

C-5「家族や友人に何が起きているか知っていますか」という設問には平均値3.45、最頻値4でやや知っているを、上回る回答を得た。

C-6「家族や友人に自分の話を聞いてもらっていると思いますか」という設問では平均値3.49、最頻値4でやや聞いてもらっていると割と聞いてもらっているとの中間の値を得た。

C-7「家族や友人の中に、あなたの果たす役割があると思いますか」という設問では平均値3.74、最頻値4でわりと役割があるという認識を示していた。

C-8「何かトラブルが起きたとき、家族や友人に頼れますか」という設問では平均値3.44、最頻値4でわりと頼れるより少しやや頼れるに近い頼れる値が示された。

C-9「あなたが一番深刻なことを誰かに話せますか」という設問については、平均値3.48、最頻値4でやや話せると割と話せるとの中間の値を得た。

C-10「家族や友人との関係でどれくらい満足していますか」とについては平均値3.49、最頻値4でやや満足と割と満足との中間の値が得られた。

C-11「あなたが病気になったとき家族や友人に手助けしてもらえますか」という問に平均値3.59、最頻値4で割と手助けが得られる傾向の値が得られた。

C-12「家族や友人に代わりに買い物に行ってもらえますか」には、平均値3.46、最頻値4でやや頼めると割と頼めるとの中間の値を得た。

C-13「家族や友人からプレゼントやお土産を頂きますか」では平均値3.62、最頻値4でややプレゼントを頂く頻度が高い傾向の値が得られた。

C-14「お昼代を忘れたとき、家族や友人からお金を貸してもらえますか」については、平均値3.65、最頻値4で昼食代程度を借りることを頼れるやや高い傾向の値が得られた。

C-15「家族や友人に家の周りの片付けを頼めますか」は平均値2.95と中間より少し低い値が得られ、家の周辺の造作までは頼みにくい傾向がられた。

C-16「家族や友人にあなたが困ったときに家事を頼めますか」については、家の周辺の造作とは異なり、平均値3.10とわずかながらやや頼める値を示した。

C-17「家族や友人はあなたの仕事や経済的問題の相談に乗ってくれますか」については、平均値3.17、最頻値4でややという仕事や経済的問題の相談に乗ってくれるという中間値が示された。

C-18「何かのイベントがあるとき、家族や友人はあなたを仲間に誘ってくれますか」については、平均値3.48、最頻値4でやや誘ってもらえると割と誘ってもらえるとの中間の値を得た。

C-19「あなたの悩みや困りごとについて、家族や友人は話を聴いてくれますか」については、平均値3.69、最頻値4でやや聴いてもらえるという値を得た。

C-20「家族や友人に普段の生活上のことについての対処などの相談に乗ってもらえますか」では、平均値3.47、最頻値4でやや相談に乗ってもらえると割に相談にのってもらえるとの中間の値を得た。

C-21「家族や友人自分の用を足すために車に乗せてもらうことはできますか」については、平均値3.30、最頻値4でやや車に乗せてもらえるという中間値が示された。

C-22「家族や友人に食事を作ってもらえるよう頼めますか」という設問では、平均値3.10、最頻値4でやや食事を作ることを頼めるという中間値が示された。

C-23「家族や友人に子どもまたは老親の世話の手伝いを頼めますか」では平均値2.60、最頻値2とあまり頼めないという低い値が得られ、家族の世話は頼まない傾向が示された。

C-24「あなたは現在、特別な援助が必要ですか」については質問項目中最小値の平均値1.97、最頻値1という特別な援助を必要としない集団であることが示された。

#### 考察

平均年齢60代の調査結果（岩瀬2008）と比較すると一般男性の1週間の会話数13.7回、1週間の電話回数10.9回、集会参加数1.3回、話し合い11回（ $n=7$ ）、女性の1週間の会話数14回、1週間の電話回数5.3回、集会参加数1.4回、話し合い7.6回（ $n=10$ ）であった。

本研究における平均的な研究参加者の社会的接触は週に2回ほど同居者以外と個人的な会話を持ち、電話は週に1.7回ほどかけ、週1回に満たない回数SNSを使い、1.46回会合に出かけ、個人的に人と会うことは週に1回に満たない0.76回であった。

これらを比較すると会話数の平均値2回、携帯を含む電話回数1.76回、SNSでのコンタクト0.96回合わせて2.69回は平均年齢が10歳近く異なるとしても、今回の調査対象者の社会的つながりにおける活動性の低さが見受けられる。

これは、精神障害者を家族内にかけてきたために派生したのか、加齢の影響によるものか今後の精査が必要である。

集会の参加数は家族会を経由しての調査であるため、家族会の総会も近かったこともあり、バイアスがかかっている恐れはあるが、一般 60 代の男女とほぼ同じ頻度の集会参加の傾向が得られたことを除き社会的接触が少なく、そこを広げるといって、自助グループである家族会の働きがあることが示唆された結果であった。

#### 研究の限界と今後の課題

地域の精神障害者家族連合会の総会の前に質問紙を配布しているため、精神障害者の家族という母集団の反映という観点からは、任意抽出法とはいえ、地域性の影響を除去できない。また、家族会の総会の前後で資料収集を行っているため、集会参加に家族会の特別な活動の影響を排除できていない。調査対象者の平均年齢が 70.9 歳と高く、比較検討する一般群のデータ量が不十分である。このような限界を踏まえ、高齢者にも回答しやすい、質問項目数の絞り込み、および、視覚的な調査票の構成、また、返信用封筒の工夫などを行い無作為標本抽出を加味した調査を行う必要がある。

#### 5. 主な発表論文等

なし

##### 〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

取得状況（計 0 件）

##### 〔その他〕

ホームページ等 なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：岩瀬 貴子

ローマ字氏名：Iwase Takako

所属研究機関名：活水女子大学

部局名：看護学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：80405539

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。